

1 少年老い易く故郷の雪達磨

2 菜の花や吾も蕪村ぶそんの影を踏む

3 ひさかたに五感の揺るる春の雪

4 窓少し開け立春の夜を覗く

5 無重力なりし万朶の花の下  
ぼんだ

6 初蝶のそこはかとなき浮力かな

7 シベリアの汚れを洗う鴨の群れ

8 凡庸に生きて七癖日向ぼこ

9 縄文じょうもんより熊と棲み分け山の栗

10 草の芽の命は踏まぬ万歩計

11 引力の隙間を舞へり草の絮わた

12 ベートーベンの田園を聴く奈良の鹿

13 行く秋や見知らぬ人の中に入る

14 少年の十二月八日白のまま

15 シンフォニーの指揮者は見えぬ虫しぐれ

16 常連の一人は見えずこぼれ萩

17 原子の火消え一湾の鰯起ぶりおこし

18 ゆつたりと風力発電山笑ふ

19 風花や奥に魔物が潜みおり

20 生傷は力士の矜恃秋闌ける

21 稀勢の里の無念共有霧深し

22 いくつかの隠し事在る花野かな

23 不確かな愛もありけり木下闇  
こしたやみ

24 物の怪けとひととき遊ぶ春の宵

25 花の夜やひとり滲こじみてカプチーノ

26 修羅の身を闇に浸して薪能  
たぎきのう

27 流れ弾注意の立て札那覇溽暑  
じよくしよ

28 病み抜きて木霊寄り添う梅古木  
こだま

29 鰭酒ひれざけに酔うてひととき不老かな  
しゅんしやう

30 春宵しゅんしやうや身の奥駆ける小悪魔

31 黒南風くろはえや役割終へし免許証

32 積み残す夢もありけり宝船

33 さりげなく見舞ひし夜の別れ霜

34 秋の夜や師匠の愛でし百句読む

35 風を抱く馬籠峠まごめとうげの初桜

36 四方山よもやまの神に一札くわはじ鋏初め

37 七草や吾の畑にも二つ三つ

38 紫は大地しずくの滴 茄子の花

39 一夜にて器量の変はる胡瓜かな

40 ままならぬこと野にもあり穴惑い

- 41 海鳴りは彼の世の声か遍路宿
- 42 残照や遍路の寝込む無人駅
- 43 山門の仁王は美男よなほこり  
かげろう
- 44 陽炎や時空を超へし無縁仏
- 45 膝寄せて来し方語る遍路宿
- 46 やはらかき雨音を聴く寝釈迦かな  
ねしやか
- 47 ハレルヤの調べに浸り賀状書く
- 48 秋立つや回転木馬に微熱あり
- 49 病棟は丘の上なり小鳥来る
- 50 噴水の天辺てっぺんにある平和かな
- 51 鯨釣はぜりや日中韓は海つづき
- 52 行き場無き核の塵かな土手青む  
ちり
- 53 新涼や農小屋からのマイウエー
- 54 余生とてめりはりは有り新酒酌む
- 55 料峭りょうしやうの近くて遠きポストかな
- 56 ゆつたりと遠出のつもり蝸牛  
かたつむり
- 57 富士山頂の消印届く夏休み  
しゅうおひ
- 58 蕉翁しやうおうの句碑寒かろう初時雨  
しぐれ
- 59 手術終へピンクのセーター羽織る妻
- 60 伊丹郷いたみごうに美味し酒あり鬼貫忌  
おにつらき